

# 潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索 ▶  
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第307号  
平成21年5月

電話 052-671-4831  
ファックス 052-671-4856  
[choonji@aichi.email.ne.jp](mailto:choonji@aichi.email.ne.jp)



【語意】

真理を明らかにし、悟りを開く  
はたらき。宗教的叡知。

知  
慧

静岡県富士市今宮にて  
撮影：超空正道

だれの  
言であらうか

四十過ぎたら  
自分の顔に  
責任を持って

ひとつ

またひとつ

日々の意識

振る舞いが

我が顔を

相応に刻みゆく

美しいシワと

美しいハゲ

美しい笑顔は

みずか  
自らが創る

人生の芸術

智慧の年輪

## 般若波羅蜜 ⑦ 智慧

六波羅蜜の最後に位置づけられる智慧は、サンスクリット語で brahṇa (ブラジュニヤー)、パーリ語では paṇṇa (パンニヤー) といい、般若はその音写であります。つまり、前の五波羅蜜の実践は、この智慧の完成を導くためのものということになります。

では、その智慧とはいかなるものか、三つの仏伝をヒントに考えてみることにいたします。

先ず一つ目は、**初転法輪**です。釈尊が菩提樹下で悟りを開かれた後、サルナート (鹿野苑) で、かつての五人の修行仲間 (五比丘) に、初めて仏法の教義を説いたという伝承です。

その内容は、**四諦**、**四聖諦**ともいい、四つの真理ということなのです。

① **苦諦** (この現実世界は苦である

という真理)、② **集諦** (苦の原因

は迷妄と執着にあるという真理)、③ **滅諦** (迷妄を離れ、執着を断ち切ることであるという真理)、④ **道諦** (悟りの境界にいたる具体的な実践方法は、**八正道**であるという真理) の四つです。

この教えは、しばしば治病原理にたとえられ、苦諦は病状を知ること、集諦は病因を知ること、滅諦は回復すべき健康状態のこと、道諦は良薬であるとされます。

ここで着目すべきは、釈尊最初の説法の内容が、四聖諦であったこと、実践方法として八正道をあげておられるということです。

次いで二つ目は、釈尊の弟子の中で、智慧第一といわれたシャールプトラ (舍利弗) にまつわる伝承です。

当時、懐疑論者サンジャヤの一番弟子であった舍利弗が、ラー

ジャグリハ (王舎城) の街で清々しい修行僧、アッサジを見かけ、「あなたの師は誰か。そしてその師の教えとはどんなものか」と尋ねました。「師は釈尊です。しかし、弟子となつてまだ日が浅く、詳しくその教えを説くことはできません」というと、「少しでもいいから」との求めに、アッサジは偈文をもつて答えました。「もろもろのことは因ありて生ず。仏陀はその因を説きたもう」と。それを聞いた舍利弗は、その教えがいかに優れたものであるか、たちどころに理解し、サンジャヤの弟子二百五十人を引き連れて、釈尊の弟子となつたということです。

ここでは、**因縁** (縁起) の法こそが、仏陀の教えの核心をなすも

のであるということに、着目すべきであります。

そして三つ目は、釈尊最後の説法のときの伝承です。釈尊は、クシナガラ（クシナガラ）の郊外の二本のサーラ樹（サーラ樹）（沙羅双樹）の下で入滅されるのですが、付き添っていたアーナンダ（アーナンダ）（阿難）は、「頼るべき師を失ってしまったら、どうすればよいのですか」と、泣いてその寂しさを訴えます。そのとき、「自らを灯明とし、自らを抛り所として、他人を抛り所とせず、法を灯明とし、法を抛り所として、他のものを抛り所とするなかれ」と仰ったのでした。これが有名な、「**自灯明**」（自灯明）「**法灯明**」の教えです。灯明とは、島あるいは洲とも訳され、それは水害のとき安全な場所、つまり、抛り所ということです。

ここでの着目は、「自己を抛り

所とし、法を抛り所とせよ」という釈尊の遺言という、重き言葉にあります。

さて、以上、釈尊が到達された智慧を探るため、その生涯において、極めて重要と思われる二つの伝承に着目してまいりましたが、ここに共通してあるのは、「**法**」ということ です。 ならば、「**法**」こそが「智慧」の正体といえそうですが、ただ、この法を定義することは、はなはだ難しいことといわねばなりません。

釈尊の滅後、南方仏教（上座部仏教）と北方仏教（大乘仏教）という大きな二つの流れができ、さらにはいくつもの宗派ができたのは、その証左といわねばなりません。しかし、ここで問題とした四聖諦・因縁、さらに、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜という仏教教

理の特徴を表す三つの印（三法印）をキーワードとして、そのつながりをたどっていきますと「空」に行き当たります。すなわち、あの『般若波羅蜜多心経』が説くところの教えです。

自分自身、生まれる前は影も形もなかったのが、不思議な因縁によって、人間としての生を享け、そして、目に見えるもの、目に見えないもの、計り知れない縁、お陰をいただいで今を生きている。すべては、因縁によって動いており、偉そうに、自分のものだと威張り散らしている、財産・才能・我が肉体さえ、縁をいただけなくなったら、生まれる以前の状態戻るしかない……。

この空の教えは、執着の心を取り去り、感謝の心と呼び起こす、智慧の神髄に違いありません。

◎法被はっぴ

着物の上に着る、羽織に似た裾すその短い上着のこと。「袴纏はかまづん」ともいうが、実はこの「法被」のほうが格は上。法被には胸にひもをつける乳ちちがついているが、袴纏にはそれが無い。それに、江戸時代には、下級武士たちも法被を着たという実績もある。

ところでこの法被の起りこりは禅宗から。かつては禅宗では儀式の際に、高僧の座る席に豪華な金欄きんらんの掛け布をフワツと掛けた。これが、実は法被の語源だというのである。

もちろんこれは単なる装飾語で、どう考えても後世の上にはおる法被とは結びつかない。しかし、上に掛ける、フワツとかぶせるといふ状態に共通点を見ることができ。案外、この両者の結びつき

はこんなところにあるのかもしれない。

◎帽子ぼうし

仏教では「帽子」と書いてもうす、と読む場合が多い。戒律では、寒いときには僧が頭を包むことが許されており、中国では六世紀頃に布製の帽子が生まれ、創始者宝誌ほうしの名をとって、誌公帽子しこうぼうしと名がつけられていたとか。

「烏帽子えぼし」などが日本で一般的になるのは平安朝のころからだから、どうやらこの語は、中国の仏教界から伝わってきたものと考えられる。

ちなみに現在では、浄土宗などの「誌公帽子しこうぼうし」、禅宗の「立帽子たてぼうし」、日蓮宗の「燕尾帽子えんびぼうし」などが知られており、多くは折りたたみ式になつている。よく、G-1ハットのように折りたたみ式の頭巾ずきんをかぶ

ていたりするが、あれも実は帽子の一つなのだ。

ちなみに、『勸進帳』の弁慶のように、修験道の山伏がかぶる白黒の布作つた小さな冠は「頭巾とぎん」「頭襟とぎん」「兜巾とぎん」と呼ばれ、これまた、帽子の一種。

(「仏教のことは『早わかり事典』

## 雑記



## ▼鯉のぼり

鯉のぼりは、風がなくて垂れ下がっているとなんとなく頼りなく、やはり、薫風くんふうに勢いよく泳いでいて欲しいものです。

ところが、これがまた、風が強すぎると、よくぞまあというほどに絡かたまってしまい、なかなかうまくいかないものです。

## ◆散歩猫見上げる先に

鯉のぼり 沐魚